

古代「神宮」の造営方針―孝徳朝から天武朝を中心に―

The Construction Policy of Ancient `Kaminomiya': Focusing on the Kōtoku to Tenmu Dynasties

鈴木 顕 房

論文要旨

『古事記』『日本書紀』、そして『風土記』には、「神宮」とされる建物施設の記述が見られる。「神宮」を専論とした研究によれば、その成立時期は、七世紀中頃以降と推定されている。七世紀中頃以降の孝徳・斉明・天智朝にかけては、伊勢・杵築、鹿島の三社に「神宮」が造営され、天武朝には天社・地社の「神宮」修理が行われた。本稿では、孝徳朝から天智朝にかけて行われた三社の「神宮」造営と、天武朝にて行われた「神宮」修理の関係性について、中央政権側の造営方針という観点から考察を行った。

ここから、伊勢、杵築、鹿島の「神宮」造営は、中央政権側の者（あるいは中央政権と関係深い氏族）と現地で神を祭る祭祀奉仕者の共同で実施されていたと考えた。一方、天武朝の「神宮」修理は、国司が管理していた神税をもとにしながら、現地の祭祀奉仕者によって実施されていたと考えられ、神祇令に規定される「神宮」造営の前段階のような方針が採られていたと指摘した。

【キーワード】神宮、伊勢、杵築、鹿島、天社・地社

はじめに

『古事記』『日本書紀』（以下、『記紀』とする）、そして『風土記』の中には、「神宮」とされる建物施設の記述が見られる。先行研究によれば、その成立時期というのは、七世紀中頃以降と推定されている²。この時期は、古代神祇令祭祀の形成期ともされることから、

この建物施設は、古代中央政権側の神社・神祇観を知る上で重視される。このように、「神宮」を考える上では、七世紀中頃以降の時代背景を念頭に置く必要性がある。しかし、先行研究の中には、これ以前にも神を祭るための建物施設の存在を考慮しているものが見られる。⁴ここから、「神宮」を考察するにあたっては、成立時期とされる七世紀中頃以前の歴史的背景を踏まえる必要性があるのも事実である。

とはいえ、「神宮」関連記事が見られるようになるのは、七世紀中頃以降であることから、この時期が一つの画期であることは間違いないだろう。この時期の「神宮」造営について明確に示すものとしては、斉明朝の杵築大社と天智朝の鹿島神宮の二社があげられる。これ以外に、個別神社の「神宮」造営記事というものは確認できないが、この建物施設を考える上で外せないのが伊勢神宮であろう。直木孝次郎氏は、伊勢神宮が天武朝に大きな発展を遂げたことを重視し、その社殿形式は天武天皇の飛鳥浄御原宮の大極殿を模したものと推定する。⁶

直木氏の推定を考慮すれば、伊勢において「神宮」が成立したのは、七世紀末頃の天武朝であるとも考えられる。一方、笹生衛氏は伊勢の「神宮」について、『日本書紀』白雉三（六五二）年九月に完成したとされる孝徳天皇の「難波長柄豊碕宮」との関連性を重視しており、両者の建物配置の密接な関連性と、『皇太神宮儀式帳』（以下、『儀式帳』とする）にて伊勢神郡の整備がこの時期に行われたという記事をあわせて、伊勢における「神宮」成立時期を七世紀中頃の孝徳朝まで遡らせて考えている。⁷笹生氏の論には、検証の余地が残るものの、後に神祇の筆頭ともされる天照大神を祭る伊勢の「神宮」が他社より遅れて成立したとは考え難い。⁸

このように、七世紀中頃の孝徳朝を画期として、伊勢、杵築、鹿島の神が坐す地に「神宮」が建てられたことは改めて重視される。これ以降の「神宮」関連記事として注目されるのが、『日本書紀』天武天皇十年（六八二）正月己丑（十九日）条の「詔畿内及諸国。修理天社。地社神宮。」である。孝徳朝以降からある特定の神社に造営されてきた「神宮」であつたが、天武朝になるとその範囲が天社・地社と広がりのあるものとなっていることが特徴的である。

ここまで、孝徳朝から天武朝にかけての「神宮」について見てきた。この時期には、杵築、鹿島の「神宮」造営と天武天皇十年に見られる「神宮」修理が行われた。伊勢については、明確な記事を確認することはできないが、孝徳朝の頃に造営されたと考えられる。

ここで気づくのが、伊勢、杵築、鹿島の三社は神郡を有するということである。『儀式帳』一初三神郡度会多氣飯野三箇郡一本記行事と『常陸国風土記』香島郡条¹¹には、伊勢と鹿島の神郡設置が孝徳朝に行われたとする。¹² 出雲神郡（意宇郡）の設置時期について明記するものは見られないが、小倉慈司氏は伊勢の二神郡と鹿島の神郡以外についても同時期に設置されたと考えており、¹³ 本稿もこれに従いたい。

伊勢、杵築、鹿島の三社において、七世紀中頃の孝徳朝に神郡が設置されたのは、三社の御祭神が中央政権において重視すべき存在と認知されていた証左であろう。とすると、三社の「神宮」造営というのは、中央政権が重視した神郡を有する神々への対応という点で共通する。しかし、それと天武天皇十年の「神宮」修理との関連は、どのように考えればよいのか。従来の先行研究では、両者について掘り下げたものはあまり見当たらない。そのため本稿では、中央政権の「神宮」造営（修理）方針という観点から、両者の考察を試みていきたい。¹⁴

一、伊勢の「神宮」造営

それでは神郡が設置された三社において、「神宮」と称される建物施設がいかに関造営されたのかを確認していく。まず、伊勢の「神宮」については、それを明確に示す記事を確認することはできない。しかし、これを考察する上で参考になるものとして、『儀式帳』一新宮造奉時行事并用物事¹⁵があげられる。これは、①山口神祭、②木本祭（忌柱）、③宮地鎮謝、④正殿地築平、⑤木本祭（御船代木）、⑥造奉物、⑦造宮使造奉物、⑧新宮飾奉使、⑨新造宮御装束といった九つの記事によつて構成されており、式年遷宮において、おもに正殿造営に関しての様相が具体的に記されている史料である。

式年遷宮については、持統朝頃より開始され、その都度、整備が行われたと考えられる。¹⁶ 『儀式帳』が平安時代初頭頃に、伊勢神宮側から撰進した解文であることを踏まえると、この記事は、平安時代初頭頃における伊勢神宮側の式年遷宮の在り方をとらえたものであることが窺える。しかし、正殿の地の整地や諸々の用材の徴収、これに関与した人々の動きなどは、孝徳朝に行われたとされる「神宮」造営にも通じるものがあるのではないか。以上を勘案した上で、『儀式帳』一新宮造奉時行事并用物事から式年遷宮、その中でも

正殿造営における人々の動向を確認したい。

常限^二二十箇年^一、一度新宮遷奉。造宮使長官一人、次官一人、判官一人、主典二人、木工長上一人、番上工四十人入参来、即取^二吉日^一、二所太神宮拜奉。即發^二役夫、伊勢、美濃、尾張、参河、遠江等五国^一、国別国司一人、郡司一人、率^二役夫^一参向造奉。(後略)

右の史料から、伊勢の正殿造営にあたっては、造宮使、木工長上、番上工といった国家より派遣された使者、そして伊勢、美濃、尾張、参河、遠江らの国々から集められた役夫らがその造営に関与していたことがわかる。ただし正殿造営にあたっては、これ以外にも現地の祭祀奉仕者である禰宜、内人、物忌なども関与していたことが次の『儀式帳』一新宮造奉時行事并用物事の①～⑤の記事から窺える。それでは、正殿造営における人々の動向について、以上の記事を取り上げながら確認したい。

①次取^二吉日^一山口神祭用物并行事

(中略) 右祭、造宮駅使忌部宿禰告刀申了、即山向物忌、以^二忌鎌^一、草木刈初、然後役夫等草刈木切所々山野散遣。然宮造了時、返祭料物如^レ始。已上イ本

②次取^二吉日^一、為^二正殿心柱造奉^一、率^二宇治大内人一人、諸内人等、戸人等^一、入^二杣木本祭、用物注^レ左。

根柱名号

(中略) 右祭、告刀申、造宮駅使忌部宿禰。其忌柱造奉了、自^レ杣出前追運来、置^二正殿地^一也。

③次取^二吉日^一、宮地鎮謝之用物并行事注^レ左。

(中略) 右祭、告刀申、地祭物忌父仕奉所侍。造宮使禰然祭仕奉了時、地祭物忌、以^二忌鎌^一、宮地草刈始、次以^二忌鋤^一、宮地穿始奉。禰宜大物忌^渡、忌柱立始、然後諸役夫等柱堅奉。

④次取^二吉日^一、正殿地築平料用物并行事注^レ左。

(中略) 爾時役夫卜合地土正殿地持運置、即禰宜内人等、築平詠儼、然後日挙^レ幕、正殿隱奉。

⑤次取^二吉日^一、為^レ造^二御船代木^一、率^二宇治大内人一人、諸内人等戸人夫^一、杣山木本祭用物并行事注^レ左。

(中略) 右如之祭、告刀申^二御巫内人^一、了時、山向物忌、先以^二忌斧^一、木本切始、然後神服織神麻統内人戸人、并諸役夫等切造奉。

御船代料材、自_レ柚出時、前追運_二進正殿地_一之。

これらの史料から、伊勢の正殿造営には大きく国家側の者と現地の祭祀奉仕者の二者が関与していたことがわかる。前者に該当すると考えられる造宮駆使（あるいは造宮使）の忌部氏と中臣氏は、①②③の祭祀に関与していた。さらに国家関与の下、各国から集められた役夫については、①③④⑤において木材の伐採や運搬、正殿の地を整地するために必要な土の運搬など、おもに力仕事に従事していたことが記されている。

次に、現地の祭祀奉仕者である禰宜、内人、物忌などが正殿造営にどのように関わっていたのか確認したい。禰宜は③において、大物忌と共に忌柱を立て、④では内人らと共に正殿の地の整地を行っていた。内人と物忌については、①②⑤の全てに関与していたことがわかり、禰宜よりも広範な役割を果たしていた。

このように、伊勢の正殿造営は国家側の者と現地の祭祀奉仕者が共同する形で執り行われていた。ただし両者については、その役割に一定の区別がなされていた点も垣間見える。特に現地の祭祀奉仕者である禰宜、内人、物忌は、忌柱や正殿の地における役割が重視されていた。これには諸国から集められた役夫も関与していたが、忌柱に触れられるのは禰宜と大物忌とされ、役夫はそれに触れられず、それ以外の柱を立てる際のみに参加していた。正殿の地の整地についても、役夫が土によって特定された地の土を正殿の地に持ち運ぶまでは行いが、実際にその土をもって整地を行うのは、禰宜と内人らであった。これ以外では、①の告刀奏上後、草木の伐採が行われるが、その場合、まず山向物忌が忌鎌をもってそれを行った後、役夫らがそれに続くと言われる。③に至っては、地祭物忌が忌鎌をもって草刈りを行うのみであり、①のように役夫の関与は見られない。

正殿造営にあたって、禰宜、内人、物忌は役夫とその役割が区別されており、忌柱や正殿について主として関与していたわけだが、これら三者が事業の主体となっていたのは、なにも正殿造営に限った話ではなかった。山口祐樹氏は、古代の伊勢神宮祭祀という観点から、大神宮司と禰宜以下の神職の性格について考察を行っており、特に後者は直接的かつ専門的に御神体（正殿）や祈願なども含む神事への関与を行っていたと指摘する¹⁸。大関邦男氏は、伊勢神宮の奉仕者として、以上の三者以外に「戸人」がいることに着目した上で、戸人の性格について、禰宜、内人、物忌と共に神宮への奉仕を行う存在ではあったが、祭儀に参列することはなかったとする。そ

の理由として、禰宜、内人、物忌は戸人を代表して祭儀の場に参列する存在であり、その点において戸人とは区別されたと指摘する。¹⁹つまり、禰宜、内人、物忌の三者は、国家側の者と共同しながら、伊勢の正殿造営にあたったが、現地における祭祀代表者として、忌柱や正殿の地の関与にはとりわけ重要な役割を担ったと考えられるのである。

以上、『儀式帳』から、式年遷宮の正殿造営における人々の動向について見てきた。式年遷宮において、正殿造営とともに重視されたこととして、神宝・御装束の奉献があげられる。特に神宝については、『儀式帳』一新宮遷奉御装束用物事の神財物十九種²¹に以下のように記されている。

金銅櫛式基 御鏡式面、九各様 麻笥式合 加世比式枚 鑄式枚 銀銅櫛式基 麻笥式合 加世比式枚 鑄式枚 弓式拾肆枚 矢式
 任式佰隻 玉纏横刀壺柄 須加流横刀壺柄 雜作横刀式拾柄 比女鞆式拾肆枚 蒲鞆式拾枚 革鞆式拾肆枚 鞆式拾肆枚 楯式拾
 肆枚 戈式拾肆竿 或竿從一枚。鴉尾琴一面。長八尺八寸、頭鴉尾、広一尺八寸、末広一尺七寸。

ただし、『儀式帳』には、誰がこれらの神宝を準備したかなどの記載は見えない。これについて、時代は下るが『延喜式』巻第四神祇四伊勢神宮を確認したい。

宮造神宝并装束二使

弁官五位以上一人、史一人、史生二人、官掌一人、神祇若諸司主典已上可堪^レ事者四人、史生四人、女孺二十一人、仕女二人、
 雜使六人、雜工六十三人、自外応^二供作^一雜色人等、随^レ事喚撰、使^二多少堪^レ濟、其女孺以上各給^二明衣^一、男各絹四丈五尺、女一
 疋一丈、雜工以上、男各布二丈六尺、女二丈、五位以下、大膳、大炊依^レ例供給、七月一日神祇官西院始行^レ事、

右によれば、神宝や装束の営造には弁官や神祇官などの関与が見えることから、これらは国家側により準備されていたことがわかる。²²『延喜式』には、「即差^二使弁大夫一人、史一人、史生二人、官掌一人、使部二人、神祇官史一人、史生一人、神部一人、卜部一人、
 部領送^二大神宮^一」²³とあるように、国家側より使者を派遣する形で御装束が奉献された。これは、『儀式帳』一新宮造奉時行事并用物事の
 新造宮御装束用物事にも、「太政官大史一人、史生一人、神祇官大史一人、史生一人」²⁴が御装束を持つてくるとあり、『延喜式』と『儀
 式帳』では人員に差異は見られるものの、御装束についても国家側が関与していた。

以上、平安時代初頭頃に成立した『儀式帳』から、伊勢の式年遷宮について確認を行ってきた。まず、正殿の造営にあたっては、国家側の者と現地の祭祀奉仕者らが共同する形で執り行われた。そして、正殿造営に伴う形で国家より神宝・御装束が奉獻されていた。こうした『儀式帳』の記事に示されていることが、孝徳朝頃の伊勢の「神宮」造営と関連するのか、この点を確認する必要がある。そのためにも、鹿島と杵築の二社に触れることで、神郡を有する三社の「神宮」造営について相互に補完しながら考えたい。

二、鹿島の「神宮」造営

鹿島の「神宮」造営について示すものは、『常陸国風土記』香島郡条の次の記事のみである。²⁵

淡海大津朝、初遣^二使人^一、造^二神之宮^一。自^レ爾已来、修理不^レ絶。

その造営には、中央政権側から使者が派遣されていたことがわかる。それでは、鹿島の「神宮」造営は、中央政権側の者のみによって執り行われたのだろうか。このことを考えるためにも、『常陸国風土記』香島郡条に見られる鹿島神に関する記事を確認する必要がある。そこで取り上げたいのが、神郡設置に関わるものである。

香島郡。

東大海、南下総、常陸堺安足湖、西流海、北郡賀、香島埠阿多可奈湖。

古老曰、難波長柄豊前大朝馭宇天皇之世、己酉年、大乙上中臣子、大乙下中臣部兔子等、請^二惣領高向

大夫^一、割^二下総国海上国造部内、輕野以南一里、那賀国造部内、寒田以北五里^一、別置^二神郡^一。其^レ処所有天之大神社・坂戸社・沼

尾社、合^二三処^一、物称^二香島天之大神^一。因名^レ郡焉。

風俗記云、鹿島香島之國、(後略)

ここから、孝徳朝の頃、鹿島の地に神郡が設置されたことがわかる。ここで重視したいのが、天之大神社、坂戸社、沼尾社というように、神郡設置以前から鹿島の地には神を祭るための建物施設が存在したことである。こうした建物施設の維持・管理等を考えれば、神郡設置以前より鹿島の地では、神を祭るための一定の人的・経済的基盤が整備されていたと考えられる。²⁶ 実際、『常陸国風土記』には、「神戸六十五烟。本八戸。難波天皇之世、加奉五十戸。飛鳥淨見原大朝加奉。九戸、合八十七戸。庚寅年、瀬戸減二戸、令定六十五戸。」とあり、孝徳朝以前より神戸（の前身か）を有していたことがわかる。これを前史として、孝徳朝の頃に神戸が五十戸加増されたのである。

以上を踏まえて天智朝の「神宮」造営を考えると、この時期には五十八戸の神戸を有しており、この建物施設の造営には神戸に居住していた人々の力を借りていたとも考えられる。つまり、天智朝の鹿島の「神宮」造営は、中央政権側の者と現地の祭祀奉仕者によって行われていた可能性が高いことになる。『常陸国風土記』には「神社周匝、ト氏居所」とあり、ト氏が鹿島神宮の周辺に居住していたことがわかる。ト氏は、「又、年別四月十日、設_レ祭灌_レ酒。ト氏種属、男女集会、積_レ日累_レ夜、楽_レ飲歌舞」とあることから、鹿島神宮の祭祀に関与していた氏族であったと考えられる。

笹生氏は鹿島神宮の神戸について、その北方に位置する厨台遺跡群に着目しながら、次のような考察を行っている。厨台遺跡群の集落は、五世紀中頃を境に形成され、七世紀代には遺跡群の全体で堅穴建物が増加する傾向を見せる。その背景に、『常陸国風土記』にある孝徳朝の神戸加増が関連していると指摘する。ここから、厨台遺跡群を鹿島の神戸集落であるとし、ト氏の集落の一部と推定する。²⁷

ト氏以外にも、鹿島神との関係性という点で忘れてはならないのが、中臣氏である。前掲の『常陸国風土記』には、鹿島の神郡設置を大乙上中臣子と大乙下中臣部菟子らが惣領高向大夫に申請している様子が記されており、中臣氏と鹿島神の関係性が示唆される。平石充氏も、七世紀頃には中臣氏・ト氏からなる奉斎集団が存在し、神戸五十戸からなるサトを構成していたとする。²⁸ このように見れば、鹿島神の現地の祭祀奉仕者として、中臣氏とト氏の存在が重視されたとも考えられる。しかし、『常陸国風土記』総記には、中臣氏について以下のように記している。²⁹

（前略）其後、至_二難波長柄豊前大宮臨軒天皇之世_一、遣_二高向臣・中臣幡織田連等_一、惣_二領自_レ坂已東之国_一。（後略）

この記載によれば、中臣氏は「難波長柄豊前大宮臨軒天皇之世（＝孝徳朝）」である七世紀中頃に中央から常陸国へと赴任してきたとあり、はじめから現地に所在していた祭祀奉仕者ではなかった可能性も考えられる。この場合、現地の祭祀奉仕者はト氏であり、中臣氏は中央政権側の存在として、現地の祭祀奉仕者であるト氏を差配しながら、鹿島神の祭祀や祭祀の場の整備に関与していたと想定される。

天智朝の「神宮」造営については、ト氏といった現地の祭祀奉仕者と中央政権から派遣された使者が共同する形で執り行われていた。これは、『儀式帳』に見られる伊勢の正殿造営と概ね同様のものではあったのだろう。この建物施設の造営を考える上で忘れてはならな

いのが、神宝等の神への奉獻品である。鹿島の場合、両者を密接に関連づける記事を確認することはできないが、『常陸国風土記』には以下のようにある。

（前略）其後、至初国所知美麻貴天皇之世^一、奉幣、大刀十口、鉾二枚、鉄弓二張、鉄箭二具、許呂四口、枚鉄一連、練鉄一連、馬一疋、鞍一具、八咫鏡二面、五色繩一連。

（後略）

俗言、美麻貴天皇之世、大坂山乃須嶺、白細乃大御服坐而、白神御杖坐、識賜命者、我前乎治奉者、故聞看食国乎、大國小國、事依給等職賜。于時、追日集八十伴緒、拳、此事而訪問、於是、大中臣神間勝命、答曰、大八島國、汝所知食國止事向賜之、香島國坐天津大御神乃拳教事者、天皇聞語、即恐驚、奉神、前件幣而於神

「美麻貴天皇（崇神天皇）」の御代に鹿島神より託宣があり、それに対して右に見える幣帛を「神宮」に奉獻したとされる。この記事は、「神宮」造営と関わるものではないため、この記事をもつて造営に伴い神への奉獻品が納められていたとはいえない。しかし、幣帛の品目を見ると、大刀、鉾、弓、箭、鏡というのは、前掲の『儀式帳』神財物十九種にも見えるものである。伊勢の神宝と共通する神への奉獻品が、天皇の側から鹿島の「神宮」に奉獻されたという記事の内容は重視すべきであろう。この記事に見られる幣帛の品目と、天皇の側が奉獻するという構図については、天智朝の「神宮」造営において、中央政権側より神への奉獻品が捧げられたことを反映しているとも考えられるのではないか。³⁰

三、杵築の「神宮」造営

ここまで、伊勢と鹿島の「神宮」造営を確認してきた。両者は概ね共通する点が見られたが、出雲国の杵築大社の「神宮」造営はやや様相が異なるといえる。『日本書紀』斉明天皇五年（六五九）³¹は歳条を見ると、斉明天皇が出雲国造に命じてその造営を行わせていたことがわかる。

命^二出雲国造^一。修^三嚴神之宮^二。狐囀^三断於宇郡役丁所^レ執葛末^二而去^一。（後略）

伊勢と鹿島の「神宮」造営は、中央政権側の者と現地の祭祀奉仕者によって行われていた。しかし、杵築大社の場合、出雲国意宇郡の氏族である出雲国造にそれが命じられており、現地の氏族に一任したものであった。それでは、杵築大社の「神宮」造営方針は、伊

勢と鹿島のそれとは異なるものと捉えてよいのだろうか。これについては、岡田莊司氏が詳しく論じている。長文となるが、重要な指摘であるため引用したい。³²

杵築神殿の創建は、出雲側による主体的な造営ではなく、大和の朝廷側の意図に基づく創建であり、時の斉明天皇の意向を受けた国家的プロジェクトの一環であったことが窺える。とすれば、これは中央朝廷から照射された出雲世界（神話）の象徴物として創立したものであろう。出雲国造が「出雲国造斎神」である熊野大社を創建したのであれば、中央の記録に特記されることはなかった。出雲国造が自身の本拠地ではない杵築の地に進出して大己貴神の神殿を創建したところに特記する意味があったのである。

岡田氏の論を踏まえた上で、『日本書紀』斉明天皇五年是歳条を検討すれば、斉明天皇としては意宇郡を本拠とする出雲国造が杵築大社の「神宮」造営を担うことを重視していたと考えられる。それでは、出雲国造（あるいは出雲臣）とはどういった氏族なのだろうか。『日本書紀』神代上第六段（本書）や神代下第九段（一書第二）³³によれば、天照大神と素戔鳴尊の誓約によって生まれた天穗日命の子孫とされ、高皇産靈尊の命により大己貴神の祭祀を司ったとされる。これ以外にも、『日本書紀』仁德天皇即位前紀には、倭屯田司として出雲臣の祖である淤宇宿禰が見える。³⁴こうした記事から、出雲臣が大和から出雲へ移住したとする説があるが、塩川哲朗氏によれば、仁德天皇即位前紀は出雲臣の祖と畿内中枢との協調関係を示すものであり、両者の関係はむしろ大和の政権内部の關係に近いと指摘する。³⁶

このように見れば、斉明天皇が出雲国造に杵築大社の「神宮」造営を命じたというのは、構造上、中央政権側の者にその任を負わせたい形となる。天智朝の鹿島の「神宮」造営では、中央政権側の者と現地の祭祀奉仕者が関与していたと捉えたが、出雲国造の性格を考慮すると、そのなかの前者の方に該当するのではないかと考える。後者の現地の祭祀奉仕者については、出雲郡神戸郷の神奴部、鳥取部、海部らが担っていたと推定されており、よって杵築大社の「神宮」造営も構造的に伊勢と鹿島同様、中央政権側の者と現地の祭祀奉仕者によって行われたと見ることができると推定される。³⁸

『儀式帳』によると、伊勢の式年遷宮では、正殿の造営と同時に神への奉獻品が捧げられていた。杵築大社の場合、斉明天皇紀五年の記事を確認しても、建物施設の造営は記されているが、神への奉獻品については示されていない。しかし、『日本書紀』神代下第九

段（一書第二）には、これを考える上で重視すべき記事が見られる。³⁹

（前略）時高皇產靈尊乃還遣二神一。勅二大己貴神一曰。今者聞二汝所言一深有二其理一。故更条条而勅之。夫汝所治顯露之事。宜是吾孫治之。汝則可三以治二神事一。又汝応住三天日隅宮者。今当供造。即以三千尋梶繩。結為三百八十紉。其造レ宮之制者。柱則高太。板則広厚。又將田供佃。又為二汝往來遊レ海之具一。高橋浮橋及天鳥船亦將供造。又於天安河亦造二打橋一。又供二造二百八十縫之白楯一。又当二主汝祭祀一者天穗日命是也。（後略）

右の史料では、高皇產靈尊が大己貴神のための天日隅宮の造営を誓い、その祭祀者を出雲国造の祖である天穗日命としている。そのなかで特に注目したいのは、「百八十縫之白楯」を供え造るとあるように、建物施設の造営と同時に神への奉獻品と考えられる楯が造られていたことが記されている点である。この神代の記事と対応関係にあるのが、『日本書紀』崇神天皇六十年七月己酉（十四日）条であろう。そこには、「詔群臣曰。武日照命。^{一云、武夷鳥}從天將來神宝。藏于出雲大神宮⁴⁰」とあり、天より將來した神宝を出雲大神宮に納めたとある。恐らくここに見える天より將來した神宝とは、神代紀の「百八十縫之白楯」にあたるものである可能性が高い。神代紀から崇神天皇紀にかけて、出雲大神宮（天日隅宮）に納められた神宝の繼承を示す描写が見られることから、中央政権側としても杵築大社の「神宮」と神宝の密接な関連性を強く意識していたと考えられる。

以上のように、杵築大社の「神宮」と神宝の密接な関連性を確認してきたわけだが、神代紀の「百八十縫之白楯」と関わるものが『出雲国風土記』にも見える。⁴¹

所三以号二楯縫一者、神魂命詔、五十足天日栖宮之縦横御量、千尋梶繼持而、百八十結々下而、此天御量持而、所三造天下二大神之宮造奉詔而、御子、天御鳥命楯部為而、天下給之。爾時、退下來坐而、大神宮御装楯造始給所、是也。仍、至レ今、楯・杵造而、奉レ出二皇神等一。故、云二楯縫一。

これは楯縫郡の地名起源説話であり、やや内容は異なるものの、大筋は神代紀と変わらず、天下を所造す大神（＝大己貴神）のための宮の造営と楯を造ることが同時に行われている。杵築大社の「神宮」造営は、畿内中枢と協調関係をもった出雲国造と現地の祭祀奉仕者の手によって行われたと推定した。神代紀もそうだが、『出雲国風土記』において、天日栖宮と奉獻品である楯を造るのは、皇孫

を擁する天神側によって行われていたのであろう。つまり、神への奉獻品である楯を造る行為は、『儀式帳』に見える伊勢の神宝と同様に、中央政權側によって行われるという理念に基づいたものと考えられるのである。

以上を踏まえると、『出雲国風土記』楯縫郡条の説話と神代紀の記事は、斉明天皇五年に行われた杵築大社の「神宮」造営と神への奉獻品製作の、神話的・説話的描写である可能性が高いことになる。『出雲国風土記』楯縫郡条には、説話を起源として、「今（＝『風土記』編纂時か）」に至るまで楯と鉾を造り、神の奉獻品とするところがある。これは、斉明天皇五年の「神宮」造営と同時に、中央政權側の関与により、楯縫郡に神への奉獻品を造る場が整備されたことを示すものではないだろうか。このように、杵築大社の「神宮」造営では、神への奉獻品が捧げられていた可能性が極めて高いと考えられる。

本章では、孝徳朝から天智朝にかけて、伊勢、杵築、鹿島の地に造営されたであろう「神宮」について、中央政權の造営方針という観点から考察を行ってきた。伊勢の場合、それを明確に示す記事が確認できないことから、平安時代初頭頃に成立した『儀式帳』の式年遷宮に関する記事を取り上げて検討した。平安時代の式年遷宮において、正殿造営は国家側の者と現地の祭祀奉仕者によって執り行われており、正殿造営に伴って国家側より神宝等の奉獻が行われていた。

こうした伊勢の式年遷宮における造営方針は、七世紀中頃以降の斉明・天智朝に造営された杵築と鹿島の「神宮」造営方針と概ね共通していたと考えられる。ここから、『儀式帳』に見られる伊勢の正殿造営と神宝等の奉獻記事というのは、七世紀中頃以降の中央政權の「神宮」の造営方針を反映している可能性が高いことになる。このように、孝徳朝以降、神郡を有した三社の「神宮」というのは、概ね共通した方針のもと造営されたと考えられる。

四、天武朝の天社・地社の「神宮」修理

孝徳朝から天智朝にかけて、中央政權によって神郡が置かれた伊勢、杵築、鹿島には「神宮」が造営され、その造営方針も、概ね三社共通するものであった。それでは、『日本書紀』天武天皇十年（六八二）正月己丑（十九日）条に見られる「神宮」についても、同

様の造営方針が採用されたのだろうか。⁴²⁾

詔「畿内及諸国」¹⁾。修理²⁾天社。地社神宮³⁾。

右の史料では、天武天皇が畿内および諸国に天社・地社の「神宮」修理を命じたとある。ここで留意すべきなのは、前述した伊勢、杵築、鹿島の「神宮」は中央政権側の者（あるいは中央政権内部と密接な関係を有する氏族）と現地の祭祀奉仕者によって造営がなされていたという点である。しかしこの記事では、天皇が畿内の国々とそれ以外の諸国に「神宮」修理を命じていることから、それぞれの国に在職する国司が「神宮」修理に関与していたと考えられる。つまり、伊勢、杵築、鹿島の「神宮」造営と天武天皇十年の「神宮」修理は、それぞれ異なる造営（修理）方針に基づいて施行されたことが窺えるのである。

それでは、国司は「神宮」修理にどのように関与していたのだろうか。これについては時代は下るが、「養老神祇令」20神戸条⁴³⁾を確認したい。

凡⁴⁾神戸調庸及田租者。並充⁵⁾造⁶⁾神宮⁷⁾。及供⁸⁾神調度⁹⁾上。其¹⁰⁾稅者。一准¹¹⁾義倉¹²⁾。皆¹³⁾国司¹⁴⁾檢校。申¹⁵⁾送¹⁶⁾所司¹⁷⁾。

これによると、神戸より得られる調庸と田租は神税とされ、「神宮」造営や神への供献品に充てられた。そして神税は国司による檢校がなされ、神祇官へと送られていた。『令集解』同条の古記⁴⁴⁾においても、ほぼ同文が見てとれることから、この記述は、大宝令段階まで遡ると考えられる。ここから、「神宮」造営には国司が管理する神税が重視されており、国司と「神宮」の関係からすれば、同条は天武天皇十年の「神宮」修理との関連が窺われる。

次に、こうした神祇令の条文が天武朝の神祇行政において、どの程度機能していたのかを確認していく。まず、傍線部(a)に記されているように、神税の基盤には神戸の存在があった。神戸の性格については、国家あるいは神祇官との関係性を重視する研究がある。⁴⁵⁾その原形は、大化前代にまで遡るとするが、ある種の実効的な性格を有するのは、孝徳朝以降からとされている。⁴⁶⁾

前述したように、『常陸国風土記』の記載によれば、鹿島神宮の神戸は孝徳朝から持統朝にかけて中央政権の関与により増減があった。『日本書紀』持統天皇四年（六九〇）正月庚子（二十三日）⁴⁷⁾条には、以下のようにある。

班¹⁸⁾幣¹⁹⁾於²⁰⁾畿内天神地祇²¹⁾。及增²²⁾神戸田地²³⁾。

すなわち持統朝に神戸・田地の拡充が行われており、それらは中央政權によって管理されていた。神戸については、史料上、孝徳朝から持統朝にかけて、中央政權からの関与が窺えることから、その間の天武朝においても中央政權の関与の下、神戸がある程度の意義をもつて機能しており、畿内とそれ以外の諸国に設置されていたと考えられる。

さらに傍線部(b)を見ると、神税については国司の管理下にあったとある。それでは、天武朝の頃の神税の扱いはどうなっていたのだろうか。『日本書紀』天武天皇六年（六七七）五月己丑（二十八日）⁴⁸ 条をもとに確認したい。

勅。天社。地社神税者三分之一為^レ擬^レ供神^一。二分^一給神主^一。

これによれば、天社・地社の神税のうち三分の一を神に供して、残りの三分の二を神主に給うようにとあり、神主への配分が大半を占める。⁴⁹ 佐々田悠氏は、この時期の神税は、神主の支配が濃厚であった可能性が高いとしつつも、三分の一が供神用に配分された理由として、天武天皇五年（六七六）を初出とする相嘗祭との関係性を重視している。令制の相嘗祭の幣帛のうち、酒稻は神税・正税によるものとされる。つまり、天武天皇六年の記事で神税の三分の一が供神用とされたのは、『神主』の支配が濃厚な『神税』に対して、相嘗祭の名の下に国家が介入したことを示している」とし、天武天皇六年以降も完全に令制と同様な構造とまでは言えないものの、相嘗祭の神税については、国司によって徐々に把握し得る段階にあったと指摘する。⁵⁰

ここから天武天皇六年の段階では、神税の管理権は神主に比重が置かれていたものの、一部は国司が管理していたと考えられる。つまりこの時期には、中央政權が認知する天社・地社のために国司から神税が供与されるという形式がある程度整備されており、これをもとにして、天武天皇十年にそれぞれの国に天社・地社の「神宮」修理が命じられたのではないか。以上のことを踏まえると、これはおよそ神祇令（の前段階）に見られるような造営（修理）方針であった可能性が高い。⁵¹

天武天皇十年の「神宮」修理については、国司が管理する神税によって執り行われたと考えられるわけだが、その際、国司はこの建物施設の修理にどれだけ関与していたのだろうか。おもに律令期の神社管理について論じた小林宣彦氏によると、八世紀代において国司が神社の管理に關与していることが窺えるとしつつも、それが制度化され本格化していく時期としては九世紀になってからだとする。⁵² 加瀬直弥氏は、奈良時代とその直前の時代における神社修造の実態について、「神社修造は、朝廷が関わる神社であっても、朝廷

ではなく、おそらくは、神社に直接奉仕する人々が実質的に担っていた」とする。⁵³

このように、奈良時代とその直前の時代の神社管理における国司の役割は、間接的なものであったとされる。とするならば、これ以前の天武天皇十年の「神宮」修理における国司の役割というのも、各神社の祭祀奉仕者に神税による料物を供与するのみに徹し、実際の修理は、その料物を得た各神社の祭祀奉仕者によって実施されていたと想定される。

天武天皇十年の「神宮」修理について、畿内とそれ以外の諸国に修理が命じられている点に注目し、神祇令の条文との関連性から考察を行ってきた。改めて、孝徳朝から天智朝にかけての「神宮」造営と天武朝の「神宮」修理を比較すると、中央政権が関与する度合いは、前者の方が圧倒的に大きかったことがわかる。前者は各神社に対して使者の派遣や神への奉獻品を捧げているのに対し、後者は中央政権が畿内と諸国に点在する天社・地社の「神宮」修理の詔を下すのみで、実際の修理は各神社の祭祀奉仕者に一任されていた。このように、後者は中央政権の関与がより間接的であった。造営（修理）方針という観点から見ると、両者の「神宮」への中央政権の関与の在り方には、明らかな差が存在していたのである。

天武朝において、これ以前とは異なる造営（修理）方針が採られるようになった要因の一つとして、天社・地社の存在があげられる。天社・地社とは、天武朝から持統朝の時期に見られる官社の呼称とされており、天武天皇十年の記事から、この頃には、畿内と諸国に点在していたと見られる。天武朝は、神祇令祭祀の整備期に位置していたこともあり、⁵⁴ 神祇令祭祀が整備される中、天社・地社もそれと足並みをそろえる形で成立をみたと考えられる。⁵⁵

中央政権としては、これら天社・地社に対して、一斉に「神宮」修理を命じる際、畿内とそれ以外の諸国に設置されていたと考えられる神戸の存在は重視されたのだろう。前述したように、天武天皇六年の段階で、天社・地社のために国司から神税が供与される形式がある程度整備されていたと考えられる。このことは、国司主導の下、各国ごとに「神宮」の修理が可能になったことを意味する。つまり、孝徳朝から天智朝にかけて行われた各個別の神社の「神宮」造営と比較すると、中央政権の関与は間接的にはなったものの、その一方で広範囲の神社に対して修理が可能になったといえ、この点は評価すべきと考える。

おわりに

本稿では、孝徳朝から天智朝にかけて行われたとされる伊勢、杵築、鹿島の「神宮」造営と天武天皇十年の「神宮」修理について、中央政権の造営（修理）方針という観点から、両者の関係性について考察してきた。

最後に、後者の造営（修理）方針は、神祇令に引き継がれたと思われるが、前者の造営方針は孝徳朝から天智朝の時期特有のものであり、後世には見られなくなってしまうのだろうか。加瀬氏は、奈良時代末期から平安時代初期の春日大社と平野神社の社殿造営とそれに附帯する神宝奉獻というのが担い手である朝廷の神社に対する格別な対応であったと捉える⁵⁶。国家側によって、社殿造営と神宝奉獻が行われるという形式は本稿で考察を行った伊勢、杵築、鹿島の「神宮」造営方針と関連するものがある。現地の祭祀奉仕者の関与は定かではないが、国家側が社殿造営とそれに伴う神宝奉獻に関与する在り方は、七世紀中頃以降を契機とし、八世紀から九世紀へと引き継がれた可能性がある。今後の課題の一つとしたい。

孝徳朝以降、中央政権にとって重視すべき神社に「神宮」という建物施設が造営（修理）されたわけだが、本稿ではその背景について考察することができなかった。この点は、広く神社の建物施設の性格や意義といったものを考える上でも重視すべきである。その他にも課題は残るが、それらについては、引き続き検討していきたい。

註

- 1 史料を見ると「神宮」「神之宮」とあるが、本稿では「神宮」で統一した。
- 2 直木孝次郎「森と社と宮」（『古代史の窓』所収、学生社、一九八二年、初出は一九五八年）、木村徳国「補遺―小論集（十五）カミノミヤの史的成立について」（『上代語にもとづく日本建築史の研究』所収、中央公論美術出版、一九八八年、初出は一九八四年）、笹生衛「神の籬と神の宮―考古学からみた古代の神籬の実態」（『神道宗教』二二三八、二〇一五年）など。

- 3 小倉慈司「律令制成立期の神社政策―神郡（評）を中心に―」（『古代律令国家と神祇行政』所収、同成社、二〇二二年、初出は二〇一三年）、岡田莊司「古代神祇祭祀体系の基本構想―天社・国（地）社祭祀制―」（『古代天皇と神祇の祭祀体系』所収、吉川弘文館、二〇二二年、初出は二〇一六年）など。
- 4 註2文献以外に、この点に着目した研究としては、北條勝貴「古代日本の神仏信仰」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一四八、二〇〇八年）。有富純也「神社殿の成立と律令国家」（『日本古代国家と支配理念』所収、東京大学出版会、二〇〇九年、初出は二〇〇九年）、笹生衛「古代の祭りと幣帛・神饌・神庫―古墳時代の祭祀遺跡・遺物から復元する祭具と祭式」（『延喜式研究』二七、二〇一一年）などがある。
- 5 これについては、出雲国意于郡に鎮座する熊野大社に関わるものとする研究がある。田中卓「出雲大社神殿の創建は果して斉明天皇朝か」（『伊勢・三輪・加茂・出雲の神々（続・田中卓著作集一）』所収、国書刊行会、二〇一一年）。しかし、『記紀』神話の整合性などを加味すれば、岡田莊司氏が指摘するように、同国出雲郡の杵築大社に関わるものと考えられる。岡田莊司 a 「古代杵築大社神殿の創建」（『古代天皇と神祇の祭祀体系』所収、吉川弘文館、二〇二二年、初出は二〇〇〇年）、b 「古代律令神祇祭祀制と杵築大社・神賀詞奏上儀礼」（『古代天皇と神祇の祭祀体系』所収、吉川弘文館、二〇二二年、初出は二〇〇九年）、c 「古代神祇祭祀と杵築大社・宇佐八幡宮」（『古代天皇と神祇の祭祀体系』所収、吉川弘文館、二〇二二年、初出は二〇〇二年）。
- 6 直木孝次郎「森と社と宮」（前掲註2論文、58頁～59頁）。
- 7 笹生衛「神の籬と神の宮―考古学からみた古代の神籬の実態」（前掲註2論文、47頁～50頁）。
- 8 『儀式帳』によれば、孝徳朝の頃に「大神宮司」が置かれたとあることを踏まえると、孝徳朝の「難波長柄豊碕宮」の影響をうける形で、伊勢において「神宮」という建物施設が成立した可能性は高い。ただし笹生氏は、両者の建物配置をあわせた理由を、「皇祖神を象徴する宝鏡と、天皇とを重ね合わせる」ところにあった」と推定する。ここで問題となるのが、孝徳朝の頃、伊勢に鎮座する神を皇祖神と認識していたかどうかである。天皇祭祀という観点から、伊勢の祭神について論証を行った木村大樹氏によると、天武朝以降の天皇祭祀の祭神は天照大神で一貫していたが、それ以前の祭神については不明瞭であるとする。ここから孝徳朝の頃、伊勢に鎮座する神は中央政權から靈威の強い神として認識されていたかもしれないが、皇祖神として認識されていたかは定かではないことになろう。「神宮」という建物施設が成立した要因については、笹生氏が指摘する孝徳朝の「難波長柄豊碕宮」は重視すべきと考えられるが、それが皇祖神と天皇という関係性の下、伊勢の地に成立したという点には検証の余地が残る。なお、『皇太神宮儀式帳』（『神道大系』神宮編一、神道大系編纂会、一九七九年、127頁参照）、笹生衛「神の籬と神の宮―考古学からみた古代の神籬の実態」（前掲註2論文、50頁）、木村大樹「天

皇祭祀の祭神」〔古代天皇祭祀の研究〕所収、吉川弘文館、二〇三二年、22頁。

- 9 『日本書紀』後篇〔新訂増補国史大系〕〈普及版〉、吉川弘文館、一九九三年、356頁。以下、旧字体等は常用漢字等に直し引用する。なお、傍線等は筆者による。

- 10 『皇太神宮儀式帳』(前掲註8書、127頁)。

- 11 『常陸国風土記』香島郡条本文編(『風土記常陸国・出雲国・播磨国・豊後国・肥前国』所収、山川出版社、二〇一六年、52頁)。

- 12 神郡については、以下の先行研究を参照した。小林宣彦「古代の神事構造と神郡の成立」〔律令国家の祭祀と災異〕所収、吉川弘文館、二〇一九年、初出は二〇一二年)、平石充「神郡神戸と出雲大神宮・於友評」〔古代文化研究〕二二、二〇一三年)、小倉慈司「律令制成立期の神社政策―神郡(評)を中心に―」(前掲註3論文)、岡田莊司「古代神祇祭祀体系の基本構想―天社・国(地) 社祭祀制―」(前掲註3論文)、川畑勝久「神郡研究史序説」〔古代祭祀の伝承と基盤〕所収、塙書房、二〇三二年)。吉松大志「神郡研究の現状と課題」(島根県古代文化センター編『伊勢と出雲』島根県古代文化センター研究論集第三集、島根県教育委員会、二〇二四年)など。

- 13 小倉慈司「律令制成立期の神社政策―神郡(評)を中心に―」(前掲註3論文、94頁)。

- 14 本稿では表記する上で、孝徳朝から天智朝の「神宮」を造宮、天武朝のものを修理と区別した。

- 15 『皇太神宮儀式帳』(前掲註8書、30～42頁)。本稿において、伊勢の「神宮」造宮を考える際に取り上げる史料としては、基本的にこれを使用する。『儀式帳』の理解には一部、『大神宮儀式解』前編(『増補大神宮叢書』五、吉川弘文館、二〇〇六年)を参照した。

- 16 式年遷宮については、以下の先行研究を参照した。所収「上代における式年遷宮―儀式帳と延喜式を中心として―」〔神道史研究〕二〇、一九七二年)、岡田莊司「神宮式年遷宮と大嘗祭」〔大嘗祭と古代の祭祀〕所収、吉川弘文館、二〇一九年、初出は一九八八年。後に『大嘗の祭り』(学生社、一九九〇年)に再収録)、中西正幸「遷宮の形態」および「古代の遷宮」〔神宮式年遷宮の歴史と祭儀〕所収、国書刊行会、二〇〇七年、初出は一九九五年)。

- 17 虎尾俊哉「儀式帳の撰進と弘仁式」〔古代典籍文書論考〕所収、吉川弘文館、一九八三年、初出は一九五二年)、佐野真人「皇太神宮儀式帳」校訂試案〔皇學館大学研究開発推進センター紀要〕二二、二〇一六年)。

- 18 山口祐樹「古代伊勢神宮祭祀と大神宮司」(『國學院雜誌』一一九、二〇一八年、71頁)。
- 19 大関邦男「古代伊勢神宮の財政構造」(『国史学』一二八、一九八六年、24頁)。
- 20 藤森馨氏は平安時代の遷宮について、主催者側である朝廷は二十年に一度の社殿造営と、装束・神宝の奉献を重視していたとする。藤森馨「神宝使考―平安時代に於ける朝廷の遷宮観―」(『改訂増補 平安時代の宮廷祭祀と神祇官人』所収、原書房、二〇〇八年、初版は二〇〇〇年、論文の初出は二〇〇二年)。
- 21 『皇太神宮儀式帳』(前掲註8書、49～50頁)。
- 22 『詠注日本史料 延喜式』上(集英社、二〇〇〇年、214頁)。
- 23 『詠注日本史料 延喜式』上(前掲註22書、240頁)。
- 24 『皇太神宮儀式帳』(前掲註8書、42頁)。
- 25 『常陸国風土記』(前掲註11書、52～54頁)。以下では本書の訓読文編を参照しながら、返り点を付した。
- 26 神戸の成立背景に触れたものに、大関邦男 a 「古代神社経済の構造」(『国史学』一五一、一九九三年)・b 「神戸についての試論」(『國學院雜誌』九五、一九九四年)と川畑勝久「神戸の起源と律令制神戸の成立」(『古代祭祀の伝承と基盤』所収、塙書房、二〇二二年)がある。着目する点に違いは見られるものの、両氏とも大化以前にその原形となるものが成立していたと指摘する。さらに大関氏によれば、神戸は国家側の関与により設定されるとしつつも、設定にあたっては在地の奉斎集団から編成された可能性が高いと指摘する。
- 27 笹生衛「『常陸国風土記』と古代の祭祀―考古資料から見た鹿島神宮と浮島の祭祀―」(『日本古代の祭祀考古学』所収、吉川弘文館、二〇一二年、初出は二〇一〇年、140～147頁)。
- 28 平石充「神郡神戸と出雲大神宮・於友評」(『古代文化研究』二二、二〇一三年、169頁)。
- 29 『常陸国風土記』(前掲註11書、36頁)。
- 30 笹生氏は神宝の組成と意味について、七世紀後半から八世紀前半頃まで神への奉献品(供献品)は、「幣」「幣帛」と総称されていたが、八世紀後半になると「幣帛」のうち武器類、鏡、馬・馬具は「神宝・神財」、布帛類は「御服」へと明確に分離したと指摘する。笹生衛「神宝の成立―組成の意味と背

景―」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊五〇、二〇一三年）。

ここから、『常陸国風土記』に見られる幣帛は、八世紀後半に「神宝・神財」「御服」と分離する以前の神への奉獻品を示すものであり、平安時代初頭頃に成立する『儀式帳』に見られる神宝とその性格というのは、概ね共通したものであったと考えられる。

31 『日本書紀』後篇（前掲註9書、271頁）。

32 岡田莊司「古代杵築大社神殿の創建」（前掲註5論文、202頁）。

33 『日本書紀』前篇（『新訂増補国史大系』（普及版）、吉川弘文館、一九九四年、39・72～73頁）。

34 『日本書紀』前篇（前掲註33書、290頁）。

35 田中卓「古代出雲攷」（『日本国家の成立と諸氏族（田中卓著作集二）』所収、国書刊行会、一九八六年、初出は一九五四年）。

36 塩川哲朗「伊勢と出雲の祭祀構造」（鳥根県古代文化センター編『伊勢と出雲』鳥根県古代文化センター研究論集第三三集所収、鳥根県教育委員会、二〇二四年、82頁）。

37 平石充氏によれば「出雲神戸の中心の一つである出雲郡出雲神戸郷は、鳥取部・海部の部民、ならびに神賤に相当するような下層民で構成されていたとみられ、大化前代に成立した部民制的な貢納奉仕関係を基礎としていた」とする。平石充「神郡神戸と出雲大神宮・於友評」（前掲註28論文、151頁）。

38 梅田義彦「大化改新とその神祇制度」（『神祇制度史の基礎的研究』所収、吉川弘文館、一九六四年、初出は一九六〇年、49頁）は、『日本書紀』齊明天皇五年条について、「必ずや正税（大税）或は神税に当るものによつて臨時の修造が営まれたものと思われる」とし、参照として「養老神祇令」20神戸条を取り上げる。しかし後述するように、神祇令に見える神戸の機能は天武朝頃に整備されたと考えられるため、梅田氏の指摘には従い難い。

39 『日本書紀』前篇（前掲註33書、72～73頁）。

40 『日本書紀』前篇（前掲註33書、169頁）。

41 『出雲国風土記』楯縫郡条本文編（前掲註11書、209～210頁）。

42 『日本書紀』後篇（前掲註9書、356頁）。

43 『日本思想史大系 律令』（岩波書店、一九七六年、215頁）。

- 44 『令集解』前篇(『新訂増補国史大系』、吉川弘文館、一九六六年、205頁)。
- 45 大関邦男 a 「古代神社経済の構造」・b 「神戸についての試論」(ともに前掲註26論文)、小倉慈司「神戸と律令神祇行政」(前掲註3書所収、初出は一九九五年)。一方、神社に伝統的に奉仕してきた従属性の強さに論点を当てた研究には、岩橋小弥太「神戸、神郡」(『神道史叢説』所収、吉川弘文館、一九七一年)や熊田亮介「神戸について」(『文化』三八―三・四、一九七五年)などがある。
- 46 大関邦男「神戸についての試論」(前掲註26論文、55頁)、小倉慈司「神戸と律令神祇行政」(前掲註45論文、195―196頁)。
- 47 『日本書紀』後篇(前掲註9書、404頁)。
- 48 『日本書紀』後篇(前掲註9書、344頁)。
- 49 『令集解』(神祇令20神戸条)の古記には、「古記云。問。神戸調庸及租。并充_下造_二神宮_一及供_レ神調度_上也。若有_レ乗者何。答。昔治_一置神祇官_一。中間給_二神主等_一。今治_一置神祇官_一。」とあり、中間については天武朝の時期と考えられている。『令集解』前篇(前掲註44書、205頁)、小倉慈司「神戸と律令神祇行政」(前掲註45論文、192頁)、佐々田悠「律令制祭祀の形成過程―天武朝の意義の再検討―」(『史学雑誌』一一一、二〇〇二年、40―41頁)を参照。
- 50 佐々田悠「律令制祭祀の形成過程―天武朝の意義の再検討―」(前掲註49論文、42―43頁)。
- 51 久禮巨雄「神祇令・神祇官の成立―古代王権と祭祀の論理」(『ヒストリア』二四一、二〇一四年、47頁)は神祇令と神祇官の成立過程について、A公的祭祀に関する規定、B公的祭祀の運営に関する規定、C非祭祀規定の三つの観点から考察を行っている。本稿で取り上げた天武天皇十年の「神宮」修理については「神社の経済的基盤を設定するとともに、全国一律に社殿建設を命じており、神祇令の『Ⅲ 非祭祀規定』の前提となる政策といえる」と述べている。
- 52 小林宣彦「古代の神社とその周縁」(前掲註12書所収、初出は二〇〇一年・二〇〇二年・二〇〇三年)。
- 53 加瀬直弥「奈良時代の神社修造」(『平安時代の神社と神職』所収、吉川弘文館、二〇一五年、初出は二〇一二年、95頁)。
- 54 中村英重「律令祭祀の形成」(『古代祭祀論』所収、吉川弘文館、一九九九年、24頁)、岡田莊司「古代神祇祭祀体系の基本構想―天社・国(地)社祭祀制―」(前掲註3論文)。
- 55 天武朝には、神祇令祭祀の初出記事が数多く確認される。その中でも大嘗祭は、『日本書紀』天武天皇二年(六七三)十二月丙戌(五日)条を、広瀬大

忌祭・龍田風神祭は、『同』四年（六七五）四月癸未（十日）条を、相嘗祭は、『同』五年（六七六）十月丁酉（三日）条を、鎮魂祭は、『同』十四年（六八五）十一月丙寅（二四日）条をそれぞれ初出記事とする。

56 加瀬直弥「古代の社殿づくりと神宝奉獻」（前掲註53書所収、初出は二〇一三年）。